

自転車は世界を広げてくれた

里草会顧問 福井正樹

小学校3年の頃には大人の自転車で遊んでいた。三角乗りと呼んでいたが、右手でサドルを抱えるようにし左足をペダルに載せ、ハンドルを左手で握る。子供仲間で支え合ったりして、村の中の緩やかな勾配の道を危なっかしくバランスを取りながらしがみついて乗る。補助輪の付いた子供用の自転車があるということは知らなかったし、村の中で三輪車を持っている子はいなかった。

それでも大人の自転車で遊んでいるうちに、前輪とサドルとペダルの三角形のフレームから右のペダルも踏めるようになり、少しくらいならたどたどしく進めることができるようになる。しかし村の外まで乗ってゆくようなことはなかった。中学生になれば背も伸びて自転車で通学した。私の村からは4キロくらいの通学だが、もっと遠くの子もいて、自転車が必需品になる。

兵庫県の北部は但馬で、京都府の北部は丹後である。村は京都府に近い県境にあった。但馬の中心は豊岡市で、そこから出石を経て京都の宮津、舞鶴までの県道がメイン道路である。但馬の円山川は豊岡あたりで合流して城崎から日本海に注ぐ。丹後は由良川水系だが、海に近いので但馬に比べると低い。この府県境に岩屋峠があって、その高低差をつづら折りの道が結んでいる。中学生の時に村の青年たちに混じって、宮津湾に貝拾いに行ったことがある。天橋立の裏の波のない海で、首が出る程度の深さの泥の多い場所に竹などの棒を立ててそれにつかまり、立ち泳ぎのように足をばたつかせて泥の中を探る。オオアサリだと思っただが、握りこぶしより大きな殻の柔らかい貝が足に当る。それをもぐって拾うのだ。弁当を食べる時間を挟んで4時間くらいかかっただろうか。かご一杯で重たいくらい取れた。伯母の家にも分けたし、家族が十分食べられる量をとった。

来る時は峠を下って来るのでそんなに思わなかったのだが、帰りは登らなければならぬ。初夏の暑い盛りである。荷物も重くなって海で疲れた体で自転車を押して、峠に登らねばならない。このつらかったことは、今でも思い出す。でも自転車に乗れるようになると、行動範囲がぐっと広がる。遠足にバスや徒歩などいくつかのコースを選択できた時、自転車で校区の端々まで巡回した。谷に入り組んだ村の概要を知ったこともある。

祖父は居間にかかっている大きな振り子の付いた時計を出石まで買いに行った思い出を話した。明治16年生まれの祖父が30歳の頃で、定期バスはとおっていなかったのだろう。朝暗いうちに出かけて16キロほどの出石の街でこの時計を買って、とっぷり日が暮れてから帰ってきた。そんな時この時計を背負って道を急いでいると、自転車に乗った人に追い越されて、とてもうらやましかったそうだ。祖父は生涯自転車に乗ることはなかった。私の母も大正2年の生まれだが、自転車の稽古はしたが乗ることはなかった。自転車が普及し活用した世代は、昭和になってからなのだろうか。

自転車屋が来て、買わないと言い続けているのに、無理矢理に置いていった。経済力や必

要の度合いなどを勘案して、押し付けていくのだが、定時制高校に通っている叔父は、新品の自転車が置かれていると、なし崩し的に乗ってしまい買わされていた。農家にとっては、今の高級乗用車並みの高価なものであったとおもう。

私は出石高校に入った時は寄宿舎に入った。しかし2年生の春から家から自転車で通学することにした。中学の同級生は寮か下宿をしていたが、私は夏休みに自転車旅行を計画し耐久力を養った。仲の良い友達を誘ってみたが、誰も賛同する者はいなかった。

砂利道の自転車通学はとても大変で夏休みまでの日中が長いころだったからできたことだろう。冬のように日が短く雪やみぞれの季節ではとても無理だ。たまにトラックやバスに出あうと息ができないほどの砂埃が立つ。黒い学生ズボンも埃で白くなる。夕立に合うと、水たまりの道を片手で傘を差して自転車をこぐのは重い。それにそろばん道路というように凸凹が激しく、砂利は自転車の通る路肩に寄って積もっている。

夏休みに入って間もなく、山陰側を下関目指して自転車旅行に出かけた。竹の籠にコメや飯盒やみそや缶詰などを詰め込み、頑丈な日常使っている自転車で朝早く家を出た。祖母が何も言わず見送ってくれた。兵庫県の東の端から出発して、一日中こぎ続けて夕暮れになる頃やっと鳥取県に入った。なにも当てがあるわけではないが泊まる場所を探さなければならぬ。

宿屋に泊る金など持ってないし、自炊し野宿でもするつもりだった。通りがかりの人に聞いてみても、そんな適当な場所等あるはずもない。こんな無計画で無謀な旅をなぜ計画したのか、その気持ちは思い出せない。青春期の錯乱なのか、日常を脱却して未知の世界に身を置きたかったのか、今となっては分からない。

当時は各学校には必ず宿直の先生が泊まっていた。夕暮れになってダメと言われたら仕方ないと思って近くの小学校を訪ねてみると、何とか泊めてもらう事が出来た。二日目は米子に近い町の農業高校、3日目は島根の廃墟の大森銀山近くの中学、4日目は島根県境の海のそばの小学校の先生の自宅で泊めてもらった。

少し打ち解けて話し始めると、先生たちはその土地の故事来歴や環境、更に生き方など高校二年の私にとっても丁寧に話してくれた。そして夕食と朝食、寝る場所を提供してお金は全くとってくれなかった。先生の方も無謀な旅に、何か関心があったのかもしれない。

二日目にはお尻の両方に大きな水ぶくれができ、三日目には両掌に水ぶくれができた。指でハンドルを支え立ち漕ぎのように尻をあげて足を使うので、自転車を降りるとそのまま倒れ込んでしまう。倒れたら体力の回復を待って何とか進むのだが、四日目くらいになると水ぶくれもつぶれて痛みも我慢できるようになった。

国道9号線が山口県に入り、海から離れて峠を越したあたりで後輪がパンクした。後ろから来たおじさんに自転車屋のありかを聞くと、事情を察して私の荷物を自分の自転車に載せて一緒に歩いてくれた。その晩泊めてくれてとても親切に家族で対応してくれた。山陰側の道は狭い砂利道だったが、国道2号線は舗装された二車線でたいした起伏も無く、空を飛ばすようにスムーズに進めることができた。